

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号
------	-------	---

氏 名 近藤 法雄

論 文 題 目

善導教義における信の確立

論文審査担当者

主査	名古屋大学教授	神塚	淑子
委員	名古屋大学教授	吉田	純
委員	名古屋大学教授	和田	壽弘
委員	武蔵野大学教授	西本	照真

論文審査の結果の要旨

【本論文の概要】

本論文は、中国浄土教の大成者、善導の現存する著作五部九巻について、その成立順を考慮しながら読み解き、信と行の問題に焦点を当てて、善導の教義が確立していく過程を考察したものである。

序章で本論文の目的と研究視点を述べたあと、第一章では、最も早い時期の著作と考えられる『観念法門』について、全体を三段に分け、各段における念仏という語の用いられ方を検討する。その結果、後段における念仏は、すべて仏を憶念するという心的な意味であるのに対し、前・中段は念仏と称名の区別が曖昧な用例があり、特に、中段は道綽の影響を受けて念仏と称名を結びつけようとする意図が見え、『観念法門』の中で最後にまとめられたもので、善導の教義の出発点となっていることを指摘する。

第二章では、善導が曇鸞の『浄土論註』をふまえつつ、浄土往生のための行体系である五念門について独自の解釈を施した『往生礼讃』について考察する。ここで善導は、五念門すべての行の裏付けとなる信の存在を重視するとともに、信の基礎にある凡夫の自覚と本願の認識という二種の知を説いており、『往生礼讃』は、主に行の方に目を向けていた『観念法門』の段階から進んで、行と信の両方に目を向ける段階に入っているとみる。

第三章では、善導が実際に行ったと考えられる儀礼の次第を記した『法事讃』を取り上げ、その内容から窺われる民衆本位の性格を確認するとともに、その文中に表現された「歓喜」「踊躍」の語に注目し、善導は行業と信心とよろこびの循環の中に信仰の本質を見出していたとみる。また、『往生礼讃』の五念門と、『観経疏』に説かれる五正行の行体系が混在することなどから、『法事讃』は、『往生礼讃』と『観経疏』の中間の時期に作られたと推測する。

第四章では、善導の主著『観経疏』の中の「散善義」に説かれる五正行について、その教化活動と結びつけて検討する。読誦・観察・礼拝・称名・讃嘆供養の五正行のうち、称名を正定業として中心に据えて他の四行を助業としていることと、行体系を説く中で三心について詳説していることの意味を考察し、そこには民衆への教化として易行道である称名を前面に立てつつも、一求道者としては信心確立の道として助業も欠かせないと考えた善導の苦心が表れているとみる。

第五章では、『般舟讃』に見える「念念称名常懺悔」という文を手掛かりに、善導における懺悔の問題を、曇鸞・道綽のそれと比較しながら検討し、厳しい懺悔の実践の中で善導は真実に徹する心を重視し、懺悔滅罪から称名滅罪へと重心を移していったことを指摘する。そして、称名と懺悔を重ねるものとして捉える点において『般舟讃』は『観経疏』と共通し、両者はほぼ同じ時期に成立したとする。最後に終章で、『観経疏』の「二河白道」の譬喩こそ善導自身の信の確立の表明であると述べて全体のまとめとする。

論文審査の結果の要旨

【本論文の評価】

中国浄土教の大成者で日本仏教にも多大の影響を与えた善導は、五部九巻の著作を残している。本論文はそれらを丹念に読み解き、善導の思想が確立する過程を探ろうとした意欲的な研究である。

本論文の特色は、一般には解義分の『観経疏』と行儀分の『観念法門』『往生礼讃』『法事讃』『般舟讃』に区別して考えられることが多い善導の著作について、そのすべてが善導の宗教者としての模索の記録であると見なし、行と信の問題に焦点をあてて、その思索の展開を詳細に考察した点にある。善導の著作の成立順については諸説があるが、本論文では、善導の著作における「念仏」「歓喜」「踊躍」「懺悔」「慚愧」などの語の用いられ方を精査し、また、五念門と五正行の行体系のあらわれ方や、信と行の関係についての考え方などを綿密に検討することによって、最初に『観念法門』が後段、前段、中段の順に成立し、ついで、『往生礼讃』、『法事讃』の順で作られ、最後に、『観経疏』と『般舟讃』がほぼ同じ頃に成立したと結論づけている。これは、やや不確実な面を残しつつも、一応、説得力のある推論となっており、善導の生涯と思想の全体像を研究するための一つの見方を示したものとして評価できるであろう。

論者は、五念門から五正行への行体系の展開、行の裏付けとしての三心の問題、あるいは、五正行のうち易行道の称名を正定業として中心に据え、他の四行を助業としていることの意味などについて、先行研究を丁寧に検討した上で論者独自の見方も加えつつ、善導の思索の跡を追っている。全体として、「自信教人信」を旨とし初唐の中国において民衆教化と浄土教儀礼の整備に大きな足跡を残した善導が、『観経疏』の「二河白道」の譬喩に示されるような信を確立するに至るまでの軌跡を、その著作から読み解こうとした、力のこもった論となっている。

ただし、本論文にはいくつかの問題点もある。善導の著作内容については周到な検討を行っているが、善導が生きた時代の社会的・宗教的状况についてほとんど言及していないため、善導の思想の背景やその独自性などがわかりにくくなっていること、行と信を手掛かりに善導の内面に深く迫ろうとするあまり、客観的な論証にやや欠ける面が見られることなどが、その主な点である。善導の著作に含まれる老荘思想的な要素や、善導が主張した称名念仏と道教の道術との関連性、あるいは、衆生には観想が困難であると説明する善導の凡夫観や、称名を滅罪と結びつける善導の懺悔観などを、広く中国宗教思想史の視点から捉えることができたならば、本論文はもっと奥行きのあるものとなっていたであろう。しかし、これらは今後の研鑽の中で克服可能なものであり、本論文の価値を大きく損なうものではない。

以上により、審査委員は全員一致して、本論文が博士（文学）の学位を与えるにふさわしいものと判定した。

論文審査の結果の要旨

論文審査の結果の要旨